

専攻科 保育専攻

学科教育科目

専攻科 保育専攻（2年課程）の教育目標

専攻科保育専攻は、建学の理念を専攻科教育の基本とし、教育目標として次の二つを定めている。

- 1) 幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養すること
- 2) 本科で学んだ知識・技術および応用能力をさらに深化させ、より高度な実践技術を身につけさせ、より質の高い保育者の養成を目指すこと

この教育目標のもと、次の三つを保育専攻の教育方針としている。

1) 研究心の育成

本科の教育を基礎として、現代社会が要請する高度化した保育内容を自律的に研究する姿勢を育み、理論的力量を備えた保育者を養成する。

2) 理論と実践の統合

本科の教育を基礎とし、専攻科で学ぶ理論（保育学研究、心理学研究、教育学研究、保育実践研究等）と実践（教育特別実習、保育内容演習等）を有機的に統合させ、専門職業人としての保育者を育成する。

3) 保育分野における今日的課題への対応

保育者に求められるさまざまな社会的要請に応えるため、今日的課題に関する科目（情報教育演習、児童家庭福祉研究、社会福祉研究等）を配置し、専攻科在学中に必要な専門知識、技術を修得させる。

なお、これらのことを実現するため、個別指導体制を充実させ、少人数教育による教育効果の向上をはかる。

平成 22 年度 (2010 年度) 入学者

《学科教育科目》

科目名	音楽演習 I				
担当者名	中島 龍一				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

子どもの歌の弾きうたい／器楽アンサンブル／ドラムジカ

《授業の到達目標》

2年間の「音楽教育」を受講したことを土台とし、幼児教育者として更に深く磨きをかけるべく音楽表現力を身につける。保育の現場で求められている『個性を育てる』『生き生きとした表現力を育てる』『想像力を豊かにする』『創造性を育てる』ことをマスターするために、その総合的な活動を理解し、保育の現場で役立つような表現について実践し、質の高い音楽力を習得する。

《テキスト》

- 『うたのメルヘン』伊藤嘉子・中島龍一 編著（共同音楽出版社）
- 『おんがく玉手箱』伊藤嘉子・中島龍一 編著（共同音楽出版社）
- 『すいかとかぼちゃのロックンロール』伊藤嘉子・中島龍一 編著（共同音楽出版社）
- 『子どもの歌から広がる音楽表現』伊藤嘉子・中島龍一他 編著（共同音楽出版社）

《参考文献》

- 「音楽教育」で使用したテキスト
- 『手あそび歌あそび60』（伊藤嘉子 編著／音楽之友社）
- 『手話によるメッセージソングベスト25』（伊藤嘉子 編著／音楽之友社）
- その他必要に応じて印刷物を配布する。

《成績評価の方法》

授業中に歌唱力、表現力のテストを行う。
 毎回の授業に取り組む姿勢と個性ある表現力を重視。
 自分の音楽能力を客観的に把握し、自分に足りない能力を開発しようとする積極的な態度を考慮する。
 表現力（40%）、歌唱力（30%）、積極的な授業内容への取り組み（30%）で評価する。
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

使用テキストの指定箇所を読み、練習しておくこと。
 授業後、おこなった実践をより自身のものとするための練習をすること。

《備考》

欠席する時は前もって必ず連絡すること。
 講義室の使用上の注意事項は厳守すること。
 約束事は必ず守ること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	専攻科生としての1年間の授業内容の説明・子どもの歌についての研究
第 2 週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」より弾きうたい実践研究（1）
第 3 週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」より弾きうたい実践研究（2）
第 4 週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」より弾きうたい実践研究（3）
第 5 週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」より弾きうたい実践研究（4）
第 6 週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」より弾きうたい実践研究（5）
第 7 週	「子どもの歌から広がる音楽表現」よりピアノ曲集の実践研究（1）
第 8 週	「子どもの歌から広がる音楽表現」よりピアノ曲集の実践研究（2）
第 9 週	「子どもの歌から広がる音楽表現」よりピアノ曲集の実践研究（3）
第10週	「子どもの歌から広がる音楽表現」よりピアノ曲集の実践研究（4）
第11週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」「おんがく玉手箱」より弾きうたい実践研究（6） ・絵本作成（1）
第12週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」「おんがく玉手箱」より弾きうたい実践研究（7） ・絵本作成（2）
第13週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」「おんがく玉手箱」より弾きうたい実践研究（8） ・絵本作成（3）
第14週	「うたのメルヘン」「すいかとかぼちゃのロックンロール」「おんがく玉手箱」より弾きうたい実践研究（9） ・絵本作成（4）
第15週	I期の総復習

《学科教育科目》

科目名	音楽演習Ⅱ				
担当者名	中島 龍一				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

子どもの歌の弾きうたい／器楽アンサンブル／ドラムジカ

《授業の到達目標》

2年間の「音楽教育」を受講したことを土台とし、幼児教育者として更に深く磨きをかけるべく音楽表現力を身につける。保育の現場で求められている『個性を育てる』『生き生きとした表現力を育てる』『想像力を豊かにする』『創造性を育てる』ことをマスターするために、その総合的な活動を理解し、保育の現場で役立つような表現について実践し、質の高い音楽力を習得する。

《テキスト》

- 『うたのメルヘン』伊藤嘉子・中島龍一 編著（共同音楽出版社）
- 『おんがく玉手箱』伊藤嘉子・中島龍一 編著（共同音楽出版社）
- 『すいかとかぼちゃのロックンロール』伊藤嘉子・中島龍一 編著（共同音楽出版社）
- 『子どもの歌から広がる音楽表現』伊藤嘉子・中島龍一他 編著（共同音楽出版社）

《参考文献》

- 音楽教育で使用したテキスト
- 『手あそび歌あそび60』（伊藤嘉子 編著／音楽之友社）
- 『手話によるメッセージソングベスト25』（伊藤嘉子 編著／音楽之友社）
- その他必要に応じて印刷物を配布する。

《成績評価の方法》

授業中に歌唱力、表現力のテストを行う。
 毎回の授業に取り組む姿勢と個性ある表現力を重視。
 自分の音楽能力を客観的に把握し、自分に足りない能力を開発しようとする積極的な態度を考慮する。
 表現力（40%）、歌唱力（30%）、積極的な授業内容への取り組み（30%）で評価する。
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。

《授業時間外学習》

使用テキストの指定箇所を読み、練習しておくこと。
 授業後、おこなった実践をより自身のものとするための練習をすること。

《備考》

欠席する時は前もって必ず連絡すること。
 講義室の使用上の注意事項は厳守すること。
 約束事は必ず守ること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	Ⅱ期における授業内容の説明・器楽アンサンブルへの導入研究
第 2 週	器楽アンサンブル研究（1）
第 3 週	器楽アンサンブル研究（2）
第 4 週	器楽アンサンブル研究（3）
第 5 週	器楽アンサンブル研究（4）
第 6 週	ドラムジカについての導入研究
第 7 週	ドラムジカ研究（1）曲目の選曲
第 8 週	ドラムジカ研究（2）台本作り
第 9 週	ドラムジカ研究（3）選曲と台本の練り直し
第10週	ドラムジカ研究（4）配役をきめて自分の持ち歌を練習／舞台背景・小道具作り
第11週	ドラムジカ研究（5）舞台背景・小道具作り
第12週	ドラムジカ研究（6）小道具・衣装をつけて台本通りに練習／変更点等の工夫
第13週	ドラムジカ研究（7）総合練習（全ての再確認と修正）
第14週	ドラムジカ研究（8）総合練習
第15週	ドラムジカ研究発表（保育科1年生に見せる）

《学科教育科目》

科目名	保育学研究				
担当者名	中井 光司				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

待機児童問題の解消、延長保育、乳児保育、病児保育、休日保育、障害児保育等、ますます広がる保育ニーズが見られるこの現代社会の中に、我々の学びと大きな使命が存在する。

こうした社会の動向や今日の子育て事情に目を向けながら、子どもにとってより良い保育のあり方や方法・課題について検討していく。

《授業の到達目標》

現代の保育ニーズと保育者の社会的役割について探求する。

《テキスト》

全国保育団体連絡会保育研究所編『保育白書』最新版

《参考文献》

適宜紹介する。

《成績評価の方法》

発表の取り組みとレポート（80%）、出席（20%）で評価する。

《授業時間外学習》

幼児教育・保育・子育て・女性の就労等に関する新聞記事を日常的に収集すること。

《備考》

本講では、新聞、雑誌等の記事を元に発表、討議の場を多く設定する。保育、教育、子育て等、子どもに関わる新聞記事等、日常の資料収集は重要。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション
第 2 週	子育てに関する社会の課題 I
第 3 週	子育てに関する社会の課題 II
第 4 週	学生による発表と討議 ①
第 5 週	家庭の保育環境と女性の職場進出 I
第 6 週	家庭の保育環境と女性の職場進出 II
第 7 週	学生による発表と討議 ②
第 8 週	集団保育の現状と課題 I
第 9 週	集団保育の現状と課題 II
第 10 週	学生による発表と討議 ③
第 11 週	今日の保育の目的と保育制度の現状 I
第 12 週	今日の保育の目的と保育制度の現状 II
第 13 週	学生による発表と討議 ④
第 14 週	レポート課題詳細説明とまとめ
第 15 週	まとめとレポート提出

《学科教育科目》

科目名	心理学研究				
担当者名	三浦 隆則				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

この講義では、本科で学んだ発達心理学、児童心理学での学びを基礎に、特定の研究者に焦点を絞った中身とする。子どもあるいは発達について、将来の保育者としての専門性を高めるためにも、深く考える場としたい。

《授業の到達目標》

全体的な発達についての理解を深めることとともに、特に、3人の発達心理学者の「発達の考え方」について、深く理解し、要点を述べるができるようになることを目指す。

《テキスト》

テキストは使用せず、適宜プリントを配布する。

《参考文献》

- ・別冊発達4「発達の理論をきずく」ミネルヴァ書房 1986年刊
- ・津守真「保育の体験と思索—子どもの世界の探究—」大日本図書 1980年刊

《成績評価の方法》

①到達目標を、「理解を深めること」、「発達の考え方について深く理解し要点を述べること」としているのので、普段の授業の最後に、「ミニレポート」で理解度、思考度を確認する。②期末に授業テーマにそった「レポート」提出を課す。

評価の割合は、ミニレポート40%、レポート課題60%。

《授業時間外学習》

毎回、次の授業時のプリントを事前に配布するので、授業日までに、予習しておくこと。参考文献は、シラバスでは2点のみの記載であるが、適宜参考文献を紹介するので、時間を生み出して読むこと。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	発達の考え方 発達とはなにか、子どもが発達するとは、生涯発達の視点から
第2週	乳幼児期の発達上の課題 愛着、基本的信頼、児童虐待
第3週	児童期の発達上の課題 不登校、いじめ、自殺、非行
第4週	ピアジェの発達論1 発達の心理学、認識のはたらき
第5週	ピアジェの発達論2 知能の発達段階
第6週	ピアジェの発達論3 知能の誕生、表象的知能の発達
第7週	エリクソンの発達論1 理論の背景、発達理論の生成
第8週	エリクソンの発達論2 エリクソンの個体発達文化の図式
第9週	エリクソンの発達論3 エリクソンの発達図式、世代の循環論
第10週	ヴィゴツキーの発達論1 発達水準のとらえ方—発達の最近接領域
第11週	ヴィゴツキーの発達論2 行動の自己制御、思想とことば
第12週	ヴィゴツキーの発達論3 研究の方法—心理学者の認識の発達水準
第13週	日本の発達研究1 津守真の保育観、発達観
第14週	日本の発達研究 鯨岡峻の保育観、発達観
第15週	発達論の再構築（授業のまとめ）

《学科教育科目》

科目名	幼児教育学研究				
担当者名	三浦 摩美				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

現在の保育形態が、どのように形成されてきたかについて知る。それによって、保育の方法や内容についても、どのような原理に基づいて選択され展開されているか理解できるようにしたい。また、幼児の活動欲求と保育者の働きかけの相互作用が成り立つ基盤、さらに、現代の保育をめぐる状況と課題についても考察する機会をもつことができるようにしたい。

《授業の到達目標》

- ・幼児教育施設の成立と保育形態の類型および変遷史について知る。
- ・どのような保育形態のもとにどのような保育実践が行われてきたかについて理解する。
- ・上の課題と目的について理解することで、保育活動を支えている方法原理への理解と洞察を深める。
- ・現代の保育状況と課題について考察する。

《テキスト》

適宜資料を配布します。

《参考文献》

『保育形態論の変遷』橋川喜美代著、春風社
『現代保育学入門』諏訪きぬ編著、フレーベル館
他、適宜紹介します。

《成績評価の方法》

平常の出席と提出物・発表内容(50%)、および学期末のレポート課題(50%)で評価する。

《授業時間外学習》

- ・授業中に配られた資料をよく読み、必要に応じて自学習や質問の整理を行うこと。
- ・前回の授業内容の要旨をまとめ、発表できるようにすること。
- ・授業中に出された課題について調べ、発表できるようにすること。

《備考》

疑問や質問をもって課題を掘り下げる、意欲的な取り組みを高く評価します。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	保育および幼児教育施設の成立と保育形態論の歴史について
第 2 週	保育形態論の歴史
第 3 週	保育形態論の歴史
第 4 週	保育形態論の歴史
第 5 週	保育形態論の歴史
第 6 週	誘導保育論の成立とさまざまな保育形態について
第 7 週	保育方法の原理について
第 8 週	自発性の原理
第 9 週	個別性と指導性
第 10 週	幼児理解と保育方法について
第 11 週	幼児の内的な理解と保育
第 12 週	環境の再構成と保育の創造
第 13 週	保育をめぐる現代社会の状況と保育の課題
第 14 週	保育をめぐる現代社会の状況と保育の課題
第 15 週	まとめ

《学科教育科目》

科目名	保育実践研究 I				
担当者名	平井 尊士				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- ・幼稚園教育の基本である環境を通して行う教育の意義についての理解と実態を通して研究
- ・教育課程の意義の理解と編成手順、評価についての研究
- ・保育実践を行う上での留意点についての実践的研究

《授業の到達目標》

保育内容を踏まえ、教育目標、内容、指導方法について、学習目標や学習内容にポイントを置き、教育方法論、教育工学全般の知識、授業設計の方法、評価方法、それらを取り巻く環境等について学習する。特に、演習（模擬授業も含む）を通して、質の高い授業を実施するための、必要な教材研究等についても理解・習得し、教育現場に出ても新任教師として自立できることを到達目標とする。

《テキスト》

佐藤典子編『現代人の社会とこころ：家族・メディア教育・文化』弘文堂（2009）

《参考文献》

- 「幼稚園教育要領解説」文部科省（フレーベル館）を参考に
- 「幼児一人一人のよさと可能性を求めて」文部省幼稚園課内、幼稚園教育研究会編（東洋館出版社）
- 「教育学実践の保育」新保育論 1 加藤繁美（ひとなる書房）

《成績評価の方法》

[評価方法] 毎回、各授業後に課すレポートや課題
 [評価の割合] 毎回、各授業後に課すレポートや課題（100点）
 授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えません

《授業時間外学習》

毎回配布する資料は学内システム（新統合 HUMANS）に電子ファイルとしておいておきます。毎回出す課題をするために必ず熟読して取り組むこと。

《備考》

- ・教育現場との連携を密にして、現場の状況をふまえた実践研究を行う。
- ・課題研究を中心に行うので、自ら学習し、実践しようとする態度を重視する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業内容について説明 保育における実践研究について
第 2 週	指導計画の意義と実際 教育設計について、教育学、学習心理学、情報科学、の3分野の背景とどのように融合するのか体系的に学習する。 《講義》
第 3 週	指導計画の添削と改善案の作成
第 4 週	保育実践による自己点検と評価 1
第 5 週	保育実践による自己点検と評価 2
第 6 週	自己点検による保育の見直しと改善案の作成
第 7 週	保育実践に基づいた研究課題への取組み
第 8 週	人間の学習過程を対象として、メディアを利用して園児及び児童に教授することの是非について、「表現」の演習を通じ、人間が視覚的要素を取り入れた「考える過程」演習を行う。《演習 1》
第 9 週	人間の学習過程を対象として、メディアを利用して園児及び児童に教授することの是非について、「表現」の演習を通じ、人間が視覚的要素を取り入れた「考える過程」演習を行う。《演習 2》
第 10 週	人間の学習過程を対象として、メディアを利用して園児及び児童に教授することの是非について、「表現」の演習を通じ、人間が視覚的要素を取り入れた「考える過程」演習を行う。《演習 3》
第 11 週	人間の学習過程を対象として、メディアを利用して園児及び児童に教授することの是非について、「表現」の演習を通じ、人間が視覚的要素を取り入れた「考える過程」演習を行う。《作品の完成》
第 12 週	データ解析との関連について：教育分野には、多くの数量的データが存在する。そういったデータを数学的手法により分析して、教育の目的に有意な情報を引き出す方法とその演習を行う《概論》
第 13 週	データ解析との関連について：教育分野には、多くの数量的データが存在する。そういったデータを数学的手法により分析して、教育の目的に有意な情報を引き出す方法とその演習を行う《演習》
第 14 週	教育における課題について：ウェブアクセシビリティやユニバーサルデザインなどの概論を説明した後、保育現場でどのように必要か考察する。《演習》
第 15 週	総括（まとめ）：第 1 回目から第 14 回の授業を通して、保育実践教育全般について、まとめを行う。

《学科教育科目》

科目名	保育実践研究Ⅱ				
担当者名	佐竹 邦子				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

保育実践においては、壁面構成・立体構成は重要な役割を果たす。この授業では、壁面構成・立体構成で情報機器をどのように活用できるか、演習形式で学ぶ。

《授業の到達目標》

壁面構成・立体構成に、情報機器を活用できる。

《テキスト》

授業中に随時提示する。
プリントも配布する。

《参考文献》

授業中に随時提示する。

《成績評価の方法》

- ・出席点 30%
- ・平常点および課題点 70%

《授業時間外学習》

- ・前回分の復習を行う。
- ・課題を提示されていた場合には、期日に間に合うよう行う。

《備考》

- ・出席を重視する。5回を超える欠席があった場合、不可とする。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	ガイダンス：授業の概要の説明
第 2 週	一般的パソコン操作の基礎の確認：Windows やワープロソフトの基本操作を確認する
第 3 週	壁面構成での情報機器の活用（1）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 4 週	壁面構成での情報機器の活用（2）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 5 週	壁面構成での情報機器の活用（3）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 6 週	壁面構成での情報機器の活用（4）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 7 週	壁面構成での情報機器の活用（5）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 8 週	壁面構成での情報機器の活用（6）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 9 週	立体構成での情報機器の活用（1）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 10 週	立体構成での情報機器の活用（2）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 11 週	立体構成での情報機器の活用（3）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 12 週	立体構成での情報機器の活用（4）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 13 週	立体構成での情報機器の活用（5）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 14 週	立体構成での情報機器の活用（6）：卒業研究内容を考慮しながら、情報機器の活用方法を考える
第 15 週	総合的演習：まとめの演習を行う

《学科教育科目》

科目名	保育実践研究Ⅲ				
担当者名	徳永 満理				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

幼児の自主的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である。ここでは、「あそびで育つ子どもたち」を主題に「あそび」について研究・実践をする。

《授業の到達目標》

子ども自らが遊びを作り出すために保育者として持たなければならない指導力を身につける。

《テキスト》

配布プリント、研究に基づく文献等。

《参考文献》

『幼稚園教育要領』
『保育所保育指針』

《成績評価の方法》

定期試験 50% 製作物 30% 課題レポート 20%

《授業時間外学習》

あそびの調べ学習と子どもを対象にあそびの実践をする

《備考》

講義のみならず、与えられた課題について自主的に学ぶこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	講義のオリエンテーション
第 2 週	あそびの概念
第 3 週	あそびの歴史 (1) 明治以前の子どものあそび 明治・大正時代のあそび
第 4 週	あそびの歴史 (2) 昭和以前の子どものあそび (戦前) 昭和の子どものあそび (戦後)
第 5 週	子どもたちとあそび (1) 自分の子どもの頃のあそび
第 6 週	子どもたちとあそび (2) 今の子どもたちのあそび
第 7 週	冒険あそびと実践
第 8 週	見て楽しむあそび
第 9 週	見て楽しむあそびの製作 (1)
第 10 週	見て楽しむあそびの製作 (2)
第 11 週	見て楽しむあそびの演習
第 12 週	見て楽しむあそびの実践 (1)
第 13 週	見て楽しむあそびの実践 (2)
第 14 週	まとめ
第 15 週	まとめ

《学科教育科目》

科目名	教育特別実習				
担当者名	藤井 恵美子				
授業方法	実習	単位・必選	10・必	開講年次・開講期	1年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

- ・ 附属加古川幼稚園、須磨幼稚園において週4日間4ヶ月の実習を行う。
- ・ 幼稚園教諭になるための心得を習得する。
- ・ 幼稚園における年間、月間、週間等の指導計画を把握し、園生活を知る。
- ・ 子どもの実態を理解し、保育者としての実践力を習得する。

《授業の到達目標》

- ・ 既習してきた関係科目の内容の総合的理解を図り、教育実習生として必要ね心得や行動、幼児理解や学級経営に携わる素地を身につけるとともに、保育者としての責務を理解することができる。
- ・ 実習について評価し、問題点を整理し、自己の課題を見出す力や将来保育者として有効に生かせるようにすることができる力を身につける。

《テキスト》

『幼稚園教育要領解説』文部科学省（フレーベル館）

《参考文献》

- ・ 幼稚園教育指導資料集 文部科学省
- ・ 必要に応じ印刷物、資料を配付

《成績評価の方法》

実習園の評価70%、実習内容並びに授業態度30%

《授業時間外学習》

- ・ 実習並びに授業は、必ず教材研究をして臨んでください。
- ・ 実習記録は丁寧に記載し、保育や課題研究に生かせるようにしてください。

《備考》

- ・ 長期間の実習であることを心に置き、健康管理に充分気をつけて臨んでください。
- ・ 教育実習生として正しいマナーを心がけてください。
- ・ 園児への配慮を怠らないようにしてください。（特に園児の安全について）
- ・ 実習中は、実習園（園長先生、主任、クラス担任など）に、迅速な報告、連絡、相談を怠らないようにしてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	・ 長期間の実習であることを心に置き、健康管理に充分気をつけて臨んでください。 ・ 教育実習生として正しいマナーを心がけてください。
第2週	課題について検討
第3週	実習の実際（視点と方法・記録のしかたなど）
第4週	実習の実際（教材研究・指導案の作成）
第5週	実習園における自己分析と検討（ビデオにおける教育実習の観察）・実習課題の見直し
第6週	実習の実際（指導案の作成・部分保育・一日保育）
第7週	実習の実際（ビデオによる実践保育の考察と検討）
第8週	実習の実際（指導案の作成・部分保育・一日保育）
第9週	実習の実際（ビデオによる実践保育の考察と検討）
第10週	実習の実際（指導案の作成・部分保育・一日保育）
第11週	実習の実際（ビデオによる実践保育の考察と検討）
第12週	実習の実際（指導案の作成・部分保育・一日保育）
第13週	実習の実際（ビデオによる実践保育の考察と検討）
第14週	教育実習の整理と反省
第15週	今後の自己の課題

《学科教育科目》

科目名	保育内容演習 I				
担当者名	宮川 和三				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

心身共に健康で、行動力のある乳幼児を育成するための基礎的理論を学ぶ。

《授業の到達目標》

新教育要領が示す幼児教育の在り方を考え、保育内容「健康」の領域で幼稚園要領にそって、幼児期の健康に関する「ねらい」の基礎理論をふまえながら、実践事例をあげて具体的に学びとり体験活動を通して将来の保育で生かせる実践力を身につける。

《テキスト》

使用しない。授業中に適宜紹介する。

《参考文献》

『健康』近藤充夫編（同文書院）

《成績評価の方法》

毎回の授業毎の評価（20%）、筆記試験（50%）、実技テスト（30%）の割合で評価する。
授業回数の1/3を超える欠席者は成績評価の対象とならない。

《授業時間外学習》

毎回の授業箇所を読んでおくこと。
毎回の実技（援助法等）についてのイメージトレーニングを行うよう指示する。

《備考》

自らが積極的に課題意識をもって、授業に取り組む。
授業中の携帯電話の使用は厳禁とする。

《授業計画》

週	授 業 計 画	
第 1 週	講義内容の概要説明 履修上の心得と諸注意 第 1 章 幼児の健康 1. 幼児期と健康について 1) 健康とは 2) 幼児期の健康	
第 2 週	2. 幼児教育と健康の指導について 1) 幼児教育の目標と健康について 2) 幼児教育と健康について ①幼児教育のあり方 ②幼稚園教育における領域 ③健康	
第 3 週	④健康のねらいと内容 ⑤健康の内容の取り扱い 3. 健康の指導基本について	
第 4 週	第 2 章 幼児の心身の発達と健康の指導 1. 幼児期の身体・運動の発達について 体格・機能・	
第 5 週	体力・運動経験と精神的発達	
第 6 週	2. 幼児期の精神発達について 幼児期における知覚の諸特徴・知覚発達の諸相・認知の発達、社会性の発達 情緒の発達	
第 7 週	情緒の特徴・パーソナリティの発達	
第 8 週	運動に関する指導（固定遊具・大型遊具）	1. マットを使った遊びを通して演習し、力をつける
第 9 週	運動に関する指導（固定遊具・大型遊具）	2. マットを使った遊び、また、親子で楽しく遊ぶゲームを通して演習し、力をつける
第 10 週	運動に関する指導（固定遊具・大型遊具）	1. とび箱を使った遊びを通して演習し、力をつける
第 11 週	運動に関する指導（固定遊具・大型遊具）	2. とび箱、ボールを使った遊びを通して演習し、力をつける
第 12 週	運動に関する指導（固定遊具・大型遊具）	1. 鉄棒を使った遊びを通して演習し、力をつける
第 13 週	運動に関する指導（固定遊具・大型遊具）	1. トランポリン・巧枝台を使った遊びを通して演習し、力をつける 実技テスト
第 14 週	全体のまとめ	
第 15 週	全体のまとめとテスト	

《学科教育科目》

科目名	保育内容演習Ⅱ				
担当者名	福田 規秀				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

子どもたちは遊びを通していろいろなことを学んでいくが、その中に適当な道具立てがあることは、子どもの環境を考える際に重要なポイントとなる。そのことを理論と実践を通して解き明かしていく。

《授業の到達目標》

遊びに意義を認め、子どものための教育遊具を考案したフレーベル。その難解な理論に出来る限りチャレンジし、その成果を自らの保育観に包含する中で、自分なりに遊具の利用について考え、保育計画等に反映できることを目指す。

また実際に遊具に触れることによってその面白さを実感し、そこに流れる理論を再確認する。学生自らが遊具から「感じとる」ことが重要となる。

《テキスト》

使用しない（レジメ作成のためのプリントを配布します）。

《参考文献》

- 『フレーベル全集第4巻、第5巻』小原國芳・荘司雅子監修（玉川大学出版部 1981）
- 『フレーベル教育学への旅』荘司雅子著 茂木正年編（日本記録映画研究所 1985）
- 『フレーベルの教育学』荘司雅子著（玉川大学出版部 1984）
- 『モンテッソーリ教育 理論と実践 ①～⑥』相良敦子他（学習研究社 1993）
- 『マインドストーム』S. ペパート（未来社 1995）

《成績評価の方法》

期末レポート 80%、発表態度や考察の精度・ディスカッションへの参加 20%で総合的に評価する。

《授業時間外学習》

自分の発表でない場合も発表予定箇所を通読の上、講義に出席のこと。
遊具について広く情報収集に努めること。

《備考》

全体の授業計画については、授業の進行状況に応じて適宜変更することがある。
自らが課題意識を持って積極的に取り組むこと。特に発表時、実践時は学生同士のインタラクションの面白さを期待する。
自ら子どもが遊んでいる姿を観察する機会を多く持ってほしい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	はじめに レジメに基づく発表について 小さい頃遊んだ遊具について
第2週	恩物に学ぶ 教具に学ぶ 実践
第3週	レジメに基づく発表（フレーベル）
第4週	レジメに基づく発表（フレーベル）
第5週	レジメに基づく発表（フレーベル）
第6週	恩物に学ぶ 教具に学ぶ 実践
第7週	レジメに基づく発表（モンテッソーリ）
第8週	レジメに基づく発表（モンテッソーリ）
第9週	レジメに基づく発表（モンテッソーリ）
第10週	発表についてのまとめ
第11週	ネフに学ぶ 実践
第12週	カブラに学ぶ 実践
第13週	コンピュータに学ぶ 実践
第14週	自分ならどう使っていくか
第15週	自分ならどう使っていくか 今後の課題 まとめ

《学科教育科目》

科目名	情報教育演習 I				
担当者名	平井 尊士				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	1年・I期

《授業のねらい及び概要》

基礎は、習得していると思うが、さらに「楽しく・有効にという観点から情報を処理する」工夫が必要である。収集した情報を整理し、分析し、結果をまとめるという流れが重要である。本演習では、学生がとくに数値化された情報を整理するための代表的なソフトウェアである、表計算ソフトの活用方法について「卒業論文」が執筆できる程度の技能を習得します。毎回テーマと目標とする技能を決めて、提示された例題を行いながら目標を達成することを目指していきます。身の回りにある情報について整理し分析したり、データの集め方や分析結果の見方もあわせて学習します。具体的には、表計算ソフトの操作方法、計算式やグラフの作成、そのほかデータベースやプログラミングなどの表計算ソフトの持つさまざまな機能について広く触れていく予定です。主に使用するコンピュータ環境は、計算機実習室ですが、ノートパソコンも必要に応じて活用し、複数のコンピュータによる協調作業も行う予定です。

《授業の到達目標》

情報社会において、デジタル情報の理解は幼児教育において重要である。

《テキスト》

適宜、資料をサーバに用意します。

《参考文献》

自分の理解度にあわせて必要であれば、図書館や市販の表計算ソフトの本を参考にしてください。

《成績評価の方法》

[評価方法] 毎回、各授業後に課すレポートや課題

[評価の割合] 毎回、各授業後に課すレポートや課題 (100点)

授業欠席回数が授業実施回数の3分の1以上欠席した者には単位を与えません

《授業時間外学習》

毎回配布する資料は学内システム（新統合 HUMANS）に電子ファイルとしておいておきます。毎回出す課題をするために必ず熟読して取り組むこと。

《備考》

コンピュータに慣れ親しむには、ひとつのソフトをじっくりと時間をかけて習熟することが大切です。そして、コンピュータやそのほかのソフトウェアへの理解も深まることにもなります。

授業には欠席しないようにするのは、もちろんですが、普段でもコンピュータを積極的に利用するようにしてください。又、本科目は教育学の視点からも、授業を計画しますので、教育方法学等の参考書も参考にしてください。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	授業の全体説明、表計算ソフトの基本操作
第 2 週	簡単な表の作成基礎
第 3 週	簡単な表の作成応用
第 4 週	保育の教育方法論に併せたコンピュータの活用：メディア教育基礎
第 5 週	保育の教育方法論に併せたコンピュータの活用：メディア教育基礎2
第 6 週	教育評価について考察する
第 7 週	表計算を利用した教育評価基礎
第 8 週	表計算を利用した教育評価応用
第 9 週	パワーポイントを活用した保育内容のためのプレゼンテーション演習基礎
第10週	パワーポイントを活用した保育内容のためのプレゼンテーション演習応用
第11週	パワーポイントを活用したプレゼンテーションのまとめ
第12週	計算機を利活用した保育教育の考察(1) “卒業研究を意識した”
第13週	計算機を利活用した保育教育の考察(2) “卒業研究を意識した”
第14週	計算機を利活用した保育教育の考察(3) “卒業研究を意識した”
第15週	まとめ

《学科教育科目》

科目名	修了研究				
担当者名	藤井 恵美子・他				
授業方法	演習	単位・必選	12・選	開講年次・開講期	1年・通年

《授業のねらい及び概要》

幼児教育理論について、購読を中心に研究を深める。幼稚園教諭、保育士としての実践力を高めるために、幼稚園や保育園並びに関係諸機関を参観、観察し幼児理解に努める。また、教育者としての資質の向上を図る。その中から、自らの「研究テーマ」を探っていくことを目的とする。

《授業の到達目標》

- ・ 関係文献の購読並びに研究テーマを探り、先行研究の整理などをし、主体的に研究に取り組むことができる。
- ・ 幼稚園教諭一種免許取得のために、研究テーマに沿って課題を達成し、学位授与機構へ提出することができる。

《テキスト》

『学士への途』学位授与機構

《参考文献》

幼稚園教育要領・保育所保育指針
必要に応じた関係文献・論文集など

《成績評価の方法》

研究成果（研究意欲）60% 授業態度40%

《授業時間外学習》

主体的に研究に取り組み、常に課題意識を持って授業に臨んでください。

《備考》

研究テーマについて個々に指導教員から指導を受けるときは、謙虚な態度で受講する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	(第 1 週) 『学士への路』を配布し、2年間の修了研究について説明。研究テーマ・研究方法について (第 2 週) 個々の研究テーマについて検討する。参考文献について図書館で調べる。
第 2 週	(第 3 週) 修了論文テーマの決定に基づき、研究目的、研究内容について研究する。 (第 4 週) 研究目的、内容について再確認し、参考文献について調べる。
第 3 週	(第 5 週) 研究目的、内容について紙媒体で提出する。 (第 6 週) 赤字の指導が入った研究目的と内容について再検討し、パソコン入力する。
第 4 週	(第 7 週) パソコン入力した研究課題を紙媒体にし、提出する。更に、研究内容について細分化する。 (第 8 週) 研究方法の内容について検討する。
第 5 週	(第 7 週) パソコン入力した研究課題を紙媒体にし、提出する。更に、研究内容について細分化する。 (第 8 週) 研究方法の内容について検討する。
第 6 週	(第 11 週) 全体の目次を作成する。 (第 12 週) 専攻科2年生の修了論文中間発表のための準備と、聴講する。
第 7 週	(第 13 週) 専攻科2年生の修了論文中間発表を参考にし、個々の論文研究を進める。 (第 14 週) II期から始まる幼稚園教育特別実習に向けて、論文内容に沿った研究指導計画書を作成する。
第 8 週	(第 15 週) 先週作成した教育特別実習における指導計画の清書をし、実習中に研究保育ができるよう研究する。 (第 16 週) 教育特別実習に向けて修了論文内容に沿った研究保育ができるよう指導案の作成をする。 修了論文の「序論」について検討する。
第 9 週	(第 17 週) 個々の研究テーマについての「序論」の研究と作成。 (第 18 週) 修了論文テーマの決定に基づき、序論、研究目的、研究内容について再度研究する。
第 10 週	(第 19 週) 研究内容の項目の検討をする。個々の論文担当者から指導を受ける。 (第 20 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。
第 11 週	(第 21 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。 (第 22 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。
第 12 週	(第 23 週) 幼稚園特別実習から第1指導実習を踏まえて、修了論文に当てはめる。 (第 24 週) 第2指導実習を踏まえて修了論文に当てはめる。
第 13 週	(第 25 週) 第3指導実習を踏まえて修了論文に当てはめる。 (第 26 週) 修了論文の大まかなレジメを作成する。
第 14 週	(第 27 週) 修了論文の大まかなレジメについて個々の担当指導者から指導を受ける。 (第 28 週) 修了論文の大まかなレジメについて個々の担当指導者から指導を受ける。
第 15 週	(第 29 週) 次年度に向けて専門指導担当者へ今までの成果を持参し、指導を受ける。 (第 30 週) 専攻科2年生への心構えと、最終修了論文の作成について個々の担当指導者から指導を受ける。

平成 21 年度
(2009 年度)
入学者

カリキュラム年次配当表

専攻科 保育専攻 平成21年度（2009年度）入学者対象

授 業 区 分	授業科目の名称	授業 方法	単位数		学年配当 (数字は適当り授業時間)				
					1年		2年		
			必修	選択	I	II	I	II	
学 科 教 育 科 目	音楽演習 I	演習		2	2				
	音楽演習 II	演習		2		2			
	美術演習	演習		3				3	
	体育演習	演習		3				3	
	保育学研究	講義		2	2				
	心理学研究	講義		2	2				
	幼児教育学研究	講義		2	2				
	保育実践研究 I	講義		2		2			
	保育実践研究 II	講義		2		2			
	保育実践研究 III	講義		2		2			
	教育特別実習	実習	10			10			
	保育内容演習 I	演習		2	2				
	保育内容演習 II	演習		2				2	
	保育内容演習 III	演習		2				2	
	保育内容演習 IV	演習		2					2
	障害児保育特論	講義		2					2
	仏教教育研究	講義		2	2				
	情報教育演習 I	演習		3	3				
	情報教育演習 II	演習		3				3	
	情報教育演習 III	演習		3					3
	児童家庭福祉研究	講義		2				2	
	社会福祉研究	講義		2				2	
	修了研究	演習		12	3	3		3	3

《学科教育科目》

科目名	美術演習				
担当者名	山下 彰一				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

日本画の制作を通して造形表現の新たな可能性を試みる。

《授業の到達目標》

美術の表現には「対象を見て描く」こと以外にもいろいろな表現がある。
この講座では日本画の制作をテーマとし、演習を通して新しい造形の考え方、感性、感覚、表現を開拓することを目的とする。

《テキスト》

なし

《参考文献》

適宜指示する。

《成績評価の方法》

提出作品（70%）と出席状況（30%）の総合評価

《授業時間外学習》

美術演習は、授業時間内で済むものではない。美しいものアイデアが浮かんだ時のために小さなスケッチブックを持って欲しい。
それにどんなことでもメモして欲しい。

《備考》

自ら考えたテーマ・スケジュールに従って制作すること。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	オリエンテーション 前提講義
第 2 週	鉛筆デッサン（りんご等のモチーフ）
第 3 週	鉛筆デッサン 中間実技指導
第 4 週	鉛筆デッサン 仕上げ実技指導
第 5 週	彩色デッサン（花等のモチーフ）
第 6 週	彩色デッサン 中間実技指導
第 7 週	彩色デッサン 仕上げ実技指導
第 8 週	パネル制作（静物）10号大 各自自由なモチーフで制作を行う。前提講義を行う。
第 9 週	自分のテーマに基づいて写生・取材を行う
第 10 週	自分のテーマに基づいて写生・取材を行う
第 11 週	本紙制作（中間実技指導）
第 12 週	本紙制作（中間実技指導）
第 13 週	本紙制作（仕上げ実技指導）
第 14 週	合評会
第 15 週	まとめ

《学科教育科目》

科目名	体育演習				
担当者名	井上 靖				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

幼児の運動内容と発達について、理論と実践を通して考える。

《授業の到達目標》

幼児の発達課題と運動遊びの成立要因及び環境について理解を深める。

《テキスト》

随時プリントを配布する。

《参考文献》

- 『運動学習実習』 中村隆一（医歯薬出版）
『目で見える動きの解剖学』 ロルフ・ヴィルヘード 金子公有（訳）
『人のかたちと運動』 服部恒明（大修館）
『子どもとあそび』 仙田満（岩波新書）
『幼児期』 岡本夏木（岩波新書）
『幼児教育と脳』 澤口俊之（文藝春秋）

《成績評価の方法》

- ・総合評価（レポート30%、テスト70%）の総合評価とする。
- ・欠席回数が授業回数の1/3を超える場合は評価の対象外とする。

《授業時間外学習》

授業終了時に次回のプリントを配布するので読んでおくこと。

《備考》

授業は事前に連絡し、教室、体育館を併用する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	幼児を取り巻く環境と幼児体育の課題
第 2 週	幼児体育をめぐる運動手段論と運動目的論
第 3 週	運動による教育としての幼児
第 4 週	生涯発達の視点と幼児体育
第 5 週	運動発達のメカニズム
第 6 週	生態の構造と運動
第 7 週	運動発現のメカニズム
第 8 週	幼児期の運動発達の特徴
第 9 週	運動と自己意識
第 10 週	運動指導の実際 ・運動と身体感覚（逆さ感覚）
第 11 週	運動指導の実際 ・運動と身体感覚（回転感覚）
第 12 週	運動指導の実際 ・運動と身体感覚（空間感覚）
第 13 週	運動指導の実際 ・運動と身体感覚（操作感覚）
第 14 週	運動遊びで育つ能力 ・運動遊びで育つ能力
第 15 週	学習のまとめとテスト

《学科教育科目》

科目名	保育内容演習Ⅱ				
担当者名	福田 規秀				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

子どもたちは遊びを通していろいろなことを学んでいくが、その中に適当な道具立てがあることは、子どもの環境を考える際に重要なポイントとなる。そのことを理論と実践を通して解き明かしていく。

《授業の到達目標》

遊びに意義を認め、子どものための教育遊具を考案したフレーベル。その難解な理論に出来る限りチャレンジし、その成果を自らの保育観に包含する中で、自分なりに遊具の利用について考え、保育計画等に反映できることを目指す。

また実際に遊具に触れることによってその面白さを実感し、そこに流れる理論を再確認する。学生自らが遊具から「感じとる」ことが重要となる。

《テキスト》

使用しない（レジメ作成のためのプリントを配布します）。

《参考文献》

- 『フレーベル全集第4巻、第5巻』小原國芳・荘司雅子監修（玉川大学出版部 1981）
- 『フレーベル教育学への旅』荘司雅子著 茂木正年編（日本記録映画研究所 1985）
- 『フレーベルの教育学』荘司雅子著（玉川大学出版部 1984）
- 『モンテッソーリ教育 理論と実践 ①～⑥』相良敦子他（学習研究社 1993）
- 『マインドストーム』S. ペパート（未来社 1995）

《成績評価の方法》

期末レポート 80%、発表態度や考察の精度・ディスカッションへの参加 20%で総合的に評価する。

《授業時間外学習》

自分の発表でない場合も発表予定箇所を通読の上、講義に出席のこと。
遊具について広く情報収集に努めること。

《備考》

全体の授業計画については、授業の進行状況に応じて適宜変更することがある。
自らが課題意識を持って積極的に取り組むこと。特に発表時、実践時は学生同士のインタラクションの面白さを期待する。
自ら子どもが遊んでいる姿を観察する機会を多く持ってほしい。

《授業計画》

週	授 業 計 画		
第1週	はじめに	レジメに基づく発表について	小さい頃遊んだ遊具について
第2週	恩物に学ぶ	教具に学ぶ	実践
第3週	レジメに基づく発表（フレーベル）		
第4週	レジメに基づく発表（フレーベル）		
第5週	レジメに基づく発表（フレーベル）		
第6週	恩物に学ぶ	教具に学ぶ	実践
第7週	レジメに基づく発表（モンテッソーリ）		
第8週	レジメに基づく発表（モンテッソーリ）		
第9週	レジメに基づく発表（モンテッソーリ）		
第10週	発表についてのまとめ		
第11週	ネフに学ぶ	実践	
第12週	カブラに学ぶ	実践	
第13週	コンピュータに学ぶ	実践	
第14週	自分ならどう使っていくか		
第15週	自分ならどう使っていくか	今後の課題	まとめ

《学科教育科目》

科目名	保育内容演習Ⅲ				
担当者名	井上 眞美子				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

「音楽リズムとダンス」「美術とダンス」「ことばとダンス」をテーマに研究と実践を重ねていく。

《授業の到達目標》

幼児の表現力を受け止め伸ばしていく力を学びとり、体験活動を通して、将来の保育で行かせる実践力を身につける。

《テキスト》

使用しない。授業中に適宜紹介する。

《参考文献》

「ダンスの教育学」(日本教育図書)
「舞踊と身体表現」(学術協力財団)

《成績評価の方法》

- ・毎回の授業毎の評価(20%)、実技テスト(80%)
- ・授業回数の1/3を超える欠席者は成績対象とならない。

《授業時間外学習》

- ・毎回実技についてのイメージトレーニングを行うよう指示する。
- ・日常生活の「環境を通しての保育」の考えを学んでいけるように感性を磨いておく。

《備考》

- ・自らが積極的に課題意識をもって授業に取り組む。
- ・リズムシューズを使用。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	講義・内容のオリエンテーション
第 2 週	表現の概念 各国のフォークダンスを体得していく
第 3 週	身体論
第 4 週	ダンスムーブメントと情調
第 5 週	子どもの発達段階と表現運動
第 6 週	子どもの生活と表現活動の内容
第 7 週	模倣の表現
第 8 週	模倣の表現
第 9 週	二人でなかよく模倣表現
第 10 週	お話を創ってみよう
第 11 週	創作したお話から表現方法、援助法等
第 12 週	①Repeat をし、動きを考えていき、効果音を考える
第 13 週	①②Repeat
第 14 週	全体のまとめ
第 15 週	全体のまとめ・発表

《学科教育科目》

科目名	保育内容演習Ⅳ				
担当者名	井上 眞美子				
授業方法	演習	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

保育者として、子どもをよく見る・聞く。子どもの育ちに応じた環境作りをして、子どもが生み出す遊びへの共感・助言・方向付けの考え方や方法等を探り、実践していく。

《授業の到達目標》

幼児の表現力を受け止め伸ばしていく力を学びとり、体験活動を通して、将来の保育で行かせる実践力を身につける。

《テキスト》

使用しない。授業中に適宜紹介する。

《参考文献》

「ドラマによる表現教育」ブライアンウェイ著（玉川大学出版）

《成績評価の方法》

- ・毎回の授業毎の評価（20%）、実技テスト（80%）
- ・授業回数の1/3を超える欠席者は成績対象とならない。

《授業時間外学習》

四季の自然への変化・生活・心の動きなど、五感を通し感性の豊かさが身につくようにさまざまな芸術に接すること。

《備考》

- ・自らが積極的に課題意識をもって授業に取り組む。
- ・リズムシューズを使用。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	表現の題材
第 2 週	イメージのふくらませ方・ことばかけ
第 3 週	基本的な動きの開発
第 4 週	対立的な性質をもつ動きからの開発
第 5 週	複合的な動きの開発・援助法
第 6 週	動きの性質からの開発・援助法
第 7 週	動きの連続からの開発・援助法
第 8 週	身体の部位の意識からの開発
第 9 週	音響効果
第 10 週	大道具・小道具の効果
第 11 週	作品を決めて、想像をする
第 12 週	作品の創作へ
第 13 週	作品の創作へ
第 14 週	作品の創作へ
第 15 週	まとめ・発表会

《学科教育科目》

科目名	障害児保育特論				
担当者名	柳田 洋				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

障害についての科学的な知識や、発達のすじ道を学ぶことによって、障害がある子どもたちの理解を深めるとともに、発達を保障していく保育場面での援助のあり方について考える。また、発達を支援していくための、健常児との関わり、家庭・社会との連携の大切さについても保育者という実践者の立場から考えていく。

《授業の到達目標》

障害児の発達を保障するために、障害を科学的に理解すると共に、障害児保育の基本的な理念と実践について考えることができる。

《テキスト》

『新版テキスト障害児保育』白石正久・近藤直子・中村尚子編 全障研出版部

《参考文献》

『新版-この子らを世の光に』糸賀一雄著 NHK 出版

『発達の扉 下 障害児の保育・教育・子育て』白石正久著 かもがわ出版

『多動症の子どもたち』太田昌孝著 大月書店 その他、授業中に適宜紹介する。

《成績評価の方法》

定期試験（テキスト・ノート等持ち込み可）（50%）。適宜、レポート等の提出（50%）を課す。

出席状況・授業態度を勘案する。

《授業時間外学習》

教科書の指定箇所をよんでおくこと。

《備考》

毎時間、出席表（感想・質問等を記入）の提出をもって出席を確認する。

提出物の期限は厳守し、返却されたものについては配布資料等とともにファイルしておくこと。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	障害児保育のあゆみと現状・課題
第 2 週	障害と発達のすじ道
第 3 週	さまざまな障害の理解①知的発達の障害
第 4 週	さまざまな障害の理解②情緒・社会性の障害
第 5 週	さまざまな障害の理解③身体・運動面の障害
第 6 週	さまざまな障害の理解④視覚・聴覚など感覚の障害
第 7 週	さまざまな障害の理解⑤医療的ケアを必要とする障害
第 8 週	障害児保育について考える①知的発達の障害
第 9 週	障害児保育について考える②情緒・社会性の障害
第 10 週	障害児保育について考える③身体・運動面の障害
第 11 週	障害児保育について考える④視覚・聴覚など感覚の障害
第 12 週	障害児保育について考える⑤医療的ケアを必要とする障害
第 13 週	発達を支援する保育者として
第 14 週	就学に向けて
第 15 週	まとめ

《学科教育科目》

科目名	情報教育演習Ⅱ				
担当者名	河野 稔				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

ウェブページの制作を通して、ICT（情報コミュニケーション技術）を活用した情報発信ができることを目指す。具体的には、自分個人のウェブページを作成する実習から、HTMLやCSSなどのウェブの基本となる知識と技術について、体験的に学ぶ。また、「ユーザビリティ（使いやすさ）」「アクセシビリティ（アクセスのしやすさ）」のような重要なトピックや、ウェブの最新動向も適宜紹介する。授業では、2号館のコンピュータ教室の設備とともに、eラーニングシステムを利用して自宅でも継続して学習できるようにする。

《授業の到達目標》

- インターネットによる情報発信に必要な、ウェブページ/サイトの制作に関する知識と技術を習得する。
- インターネットというメディアに適した、情報の構造の把握や情報のデザインができるようになる。
- 各種ウェブサービス、ユーザビリティとアクセシビリティについての知識を習得する。

《テキスト》

テキストは、授業のWebサイトとeラーニングシステム上に公開する。また、必要に応じてプリントを配布する。

《参考文献》

- ・『HTML/XHTML&スタイルシート レッスンブック』エビスコム（ソシム）2007年
 - ・『詳細 HTML&XHTML&CSS 辞典 第4版』大藤幹（秀和システム）2009年
 - ・『ユニバーサル HTML/XHTML』神崎正英（毎日コミュニケーションズ）2000年
- その他の文献や資料は必要に応じて紹介する。

《成績評価の方法》

- ・提出課題を70%、作成したウェブページへの講評（3回実施）を30%として評価する。
- ・欠席回数が授業実施回数の3分の1以上の場合は、単位を与えない。

《授業時間外学習》

予習として、毎回の課題で作成する自分のウェブページ上で紹介する、インターネット上の資料を収集しておくこと。復習として、授業で説明したウェブに関する技術が活用できるように、整理しまとめておくこと。また、授業で紹介した重要なトピックやウェブの最新動向が、実際に利用されているウェブサイトを調査し、サイトが想定する読者層や利用目的を把握しておくこと。

《備考》

ウェブページの作成において、「デザイン」することは、グラフィックやレイアウトのような「見た目を引き立たせるため」だけではない。文書やコンテンツ全体の構造といった、Webページの「わかりやすさ・伝えやすさ」のためにも重要な要素であり、ウェブを利用したコミュニケーションにおいて必須のものである。

ウェブページの作成そのものは楽しい行為だが、役立つものを作成するには、伝える相手への配慮が大切であることを心がけて、授業に参加してほしい。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第1週	ガイダンス、eラーニングによる学習の説明
第2週	ウェブの基礎知識/HTML(1) 基本的な構造を持つウェブページの作成
第3週	HTML(2) 文字装飾を利用したウェブページの作成
第4週	HTML(3) 表のあるウェブページの作成
第5週	HTML(4) 画像を利用したウェブページの作成/作成したウェブページへの講評
第6週	CSS 基礎(1) HTMLの要素への簡単なデザイン
第7週	CSS 基礎(2) 要素の空間へのデザイン
第8週	CSS 基礎(3) フォント関係のデザイン
第9週	CSS 基礎(4) 「クラス」を利用したデザイン
第10週	CSS 基礎(5) ページ全体や要素の背景へのデザイン/作成したウェブページへの講評
第11週	CSS 応用(1) プログラムによるデザインの切り替え
第12週	CSS 応用(2) ページ全体のレイアウトの設定(1)
第13週	CSS 応用(3) ページ全体のレイアウトの設定(2)
第14週	CSS 応用(4) ユーザビリティとアクセシビリティ
第15週	作成したウェブページへの講評、授業全体のふり返り

《学科教育科目》

科目名	情報教育演習Ⅲ				
担当者名	岡本 一彦				
授業方法	演習	単位・必選	3・選	開講年次・開講期	2年・Ⅱ期

《授業のねらい及び概要》

幼児教育現場で子どもの活動を記録したり、保育指導内容を考察するための材料としてカメラやビデオカメラが活用されることがある。撮影されたものを適切に編集すれば資料としての有効性がより期待できるものとする。そのための編集技能の修得をねらいとする。

《授業の到達目標》

デジタルカメラ、ビデオカメラ、携帯電話などの進歩は著しく、安価で、小型であるが相当質の良い画像資料が手軽に活用しやすい環境になってきている。そのため、以前に比べて保育指導のなかで子どもの活動状況を記録することが容易になってきているので、静止画や動画を保育指導内容の記録として、また、研究資料としての有効性が期待できる。資料としての有効性をより高めるためのコンピュータの活用方法と技能が修得できることを目標とする。

《テキスト》

配布するプリントを使用する。

《参考文献》

編集するソフトウェアによってそれぞれの活用法を解説した書籍が多数発行されているが、Microsoft の組込みソフトを活用するので特に指定する参考書はありません。ビデオ編集の一般的な参考として例えば、小寺信良他著「つなぐ！DVビデオ編集パーフェクトマニュアル」(株式会社インプレス発行) などがある。

《成績評価の方法》

授業中の学習状況 (30%) と課題に対する製作内容 (40%) で総合的に評価する。
出席率を成績評価のうえで重視します。(30%)

《授業時間外学習》

特に授業時間外での学習を必要としないが、コンピュータに慣れていない場合は、操作に慣れるように努める。

《備考》

コンピュータを使った製作作業が中心になりますので、欠席をしない。プリントと口頭で指示するもの内容以上に自発的発展を試みるように努める。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	静止画像データファイルについての基礎知識。
第 2 週	デジタルカメラを使って附属幼稚園および大学キャンパス内で条件を変更しながら写真撮影。
第 3 週	撮影済みの写真のコンピュータへの取込みと撮影条件の違いによる写真の比較をする。コンピュータ上の写真ファイルを Microsoft Office Picture Manager 及びフリーソフトウェアを使って簡単な補正。
第 4 週	コンピュータ上の写真ファイルを Microsoft Office Picture Manager およびフリーソフトウェアを使って簡単な補正。
第 5 週	同上。
第 6 週	補正前、補正後の写真を比較するため、Microsoft Office Power Point を使って呈示説明用資料の作成。
第 7 週	動画画像データファイルについての基礎知識。
第 8 週	Microsoft Windows Movie Maker2 の基本操作法を習得。
第 9 週	撮影済の附属幼稚園における餅つき行事資料を用いて動画編集を行う。
第 10 週	同上の続き作業を行う。
第 11 週	同上の続き作業を行う。
第 12 週	デジタルカメラ、携帯電話の動画撮影機能を使って、附属幼稚園および大学キャンパス内で PR 資料を作る想定で撮影。
第 13 週	デジタルカメラおよび携帯電話から撮影済動画ファイルをコンピュータに取り込む。Microsoft Movie Maker2 で編集可能な形式に変換処理を行う。
第 14 週	形式変換した動画ファイルを Microsoft Movie Maker2 で編集
第 15 週	同上の続き作業を行う。この授業で作成した資料ファイルを CD 又は DVD に保存する。授業の総括をする。

《学科教育科目》

科目名	児童家庭福祉研究				
担当者名	杉山 貴要江				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

現代社会における児童福祉の現状と課題について学習します。
 保育士は保育、子育て支援の専門職であることを認識し、児童福祉での学びが実践活動に活かせるようにすることを目指します。

《授業の到達目標》

現代社会における児童の実態を理解し、児童の福祉問題についての的確に分析できるようにします。

《テキスト》

『保育士養成テキスト3 児童福祉』 山野則子・金子恵美編著 (ミネルヴァ書房)
 『保育福祉小六法』 小六法編集委員会編 (株式会社みらい)

《参考文献》

授業中に紹介する予定です。

《成績評価の方法》

レポート(100%)で評価します。

《授業時間外学習》

テキストに沿って授業は進めます。シラバスで授業の進度を確認し、事前にテキストを読んでおいてください。

《備考》

少人数による授業ですので、活発な意見交換を行いたいと思っています。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	保育者と児童福祉 現代の子どもの姿とその保護者の状況を概観し、保育者に何が求められているのか、本授業で何を学ぶのかについて、説明します。
第 2 週	児童福祉の理念とその歴史的展開 児童福祉理念の変遷を概観し、「児童の権利に関する条約」に謳われる子どもの権利のとらえ方を理解します。
第 3 週	わが国の児童福祉に関する制度と福祉機関・施設 児童福祉を支える法律、制度とその実施機関について学習します。
第 4 週	児童福祉の現状と課題-1 少子化対策と子育て支援に関する児童福祉サービスの変遷と実情について学習します。
第 5 週	児童福祉の現状と課題-2 健全育成について、主に児童厚生施設の実態について学習します。
第 6 週	児童福祉の現状と課題-3 母子保健サービスの目的・意義、実施体制等について理解し、児童福祉における健康診査の意義について学習します。
第 7 週	児童福祉の現状と課題-4 保育サービスの今日的意義と目的について理解し、保育所の歴史と役割の変遷についても学習します。
第 8 週	児童福祉の現状と課題-5 児童虐待が増加する現状を分析し、虐待防止に関する施策と保育者の役割について考えます。
第 9 週	児童福祉の現状と課題-6 障がいのある子どもとその保護者への支援について学習し、早期療育の意義について考えます。
第 10 週	児童福祉の現状と課題-7 社会的養護について、児童福祉施設の種別とその目的を理解します。また、家庭的養護についても学習します。
第 11 週	児童福祉の現状と課題-8 少年非行の実態を概観し、児童自立支援施設の内容と役割について学習します。また、情緒障がいについての理解を深めます。
第 12 週	児童福祉の現状と課題-9 ひとり親家庭の動向について分析し、その支援策を学習します。母子生活支援施設の実情、父子家庭の福祉施策についても触れ、その課題について考えます。
第 13 週	諸外国の現状 視聴覚教材を活用し、スウェーデンの保育所の実態を捉え、わが国の実情と比較検討します。そして、児童福祉の理念を踏まえた保育所のあり方について考察します。
第 14 週	児童福祉の実践と児童福祉従事者 児童福祉の専門職について確認し、関連機関の連携、援助方法について、事例を通して学習します。
第 15 週	学習のまとめ 児童福祉に関する学習を振り返り、将来に向けての研究課題を見つけ、その解決方法を探ります。

《学科教育科目》

科目名	社会福祉研究				
担当者名	高橋 千代				
授業方法	講義	単位・必選	2・選	開講年次・開講期	2年・I期

《授業のねらい及び概要》

多様な社会福祉の制度や活動を貫く諸原理や思想を、その背後にある価値観とともに把握し、社会福祉が現代社会に存在する意味を問うことを通して、社会福祉の理解を深める。

《授業の到達目標》

社会福祉は制度・政策の体系と方法・技術の体系を併せ持ち、人間の精神・心理から、社会・政治の側面まで幅広い課題に対応している。課題に対応するために、社会福祉の価値に立脚した幅広い視野と人間観と社会観を養ってほしい。

《テキスト》

「社会福祉の原理と思想」 岩田正美編 有斐閣

《参考文献》

随時紹介

《成績評価の方法》

レポート（70%）、小テスト（30%）

《授業時間外学習》

なぜ現代社会は市場経済と個人の努力だけでは成り立たないのかを考えてみる。なぜ生活困難が特定層に集中するのかを考えてみる。なぜ社会の中で虐待が起こるのかを考えてみる。男女共同参画に向けて、社会福祉の果たす役割を考えてみる。

《備考》

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	生活と社会福祉（現代生活と社会福祉、生活困難の社会問題化、社会福祉へのニーズ）
第 2 週	社会制度としての社会福祉（社会福祉の定義、理念、実体）
第 3 週	日本の社会福祉論の展開①（大河内一男、竹内愛二、考橋正一）
第 4 週	日本の社会福祉論の展開②（岡村重夫、嶋田啓一郎、一番ヶ瀬康子、三浦文夫）
第 5 週	社会福祉の歴史的展開①イギリス（救貧法、慈善事業、社会事業、福祉国家）
第 6 週	社会福祉の歴史的展開②アメリカ（民間活動、政府活動、専門家活動）
第 7 週	社会福祉の歴史的展開③日本（慈善事業、社会事業、戦後の社会福祉、福祉改革）
第 8 週	社会福祉の制度と実践を支える思想と価値（思想、価値、倫理）
第 9 週	社会福祉の実施方法①（ニーズ把握の視点と方法、ニーズ充足の方法）
第 10 週	社会福祉の実施方法②（実施体制、権利擁護、サービス評価）
第 11 週	社会福祉の権利と公的責任（憲法と公的責任、社会福祉の公的責任）
第 12 週	社会福祉の行財政（措置制度、利用制度、運営費）
第 13 週	市民社会における福祉活動（福祉活動による修正、公私役割分担）
第 14 週	社会福祉の国際動向（スウェーデン、ドイツ）
第 15 週	男女共同参画に向けての社会福祉の展望（社会における男女間格差、女性とケアの結びつき、ジェンダー政策）

《学科教育科目》

科目名	修了研究				
担当者名	藤井 恵美子・他				
授業方法	演習	単位・必選	12・選	開講年次・開講期	2年・通年

《授業のねらい及び概要》

研究テーマを考え、参考文献探しと、学生自らの研究課題について検討する。

《授業の到達目標》

幼稚園教諭一種免許取得のために、研究テーマに沿って課題を達成し、学位授与機構へ提出することができる。

《テキスト》

『学士への途』学位授与機構

《参考文献》

幼稚園教育要領及び指導書・保育所保育指針
必要に応じた関係文献、論文集など

《成績評価の方法》

研究成果（研究意欲）60%、授業態度40%

《授業時間外学習》

主体的に研究に取り組み、常に課題意識を持って授業に臨んでください。

《備考》

研究テーマについて指導教員から指導を受ける時は、謙虚な態度で受講する。

《授業計画》

週	授 業 計 画
第 1 週	(第 1 週) 新年度の学位授与機構—学士への途—と、申請書類を配布し、10月1日に提出する書類の説明をする。 (第 2 週) 今まで作成した修了論文のまとめをする。
第 2 週	(第 3 週) 修了論文テーマの決定に基づき、序論、研究目的、研究内容、目次について再度研究する。 (第 4 週) 研究内容の項目の検討をし、個々の論文担当者から指導を受ける。
第 3 週	(第 5 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。 (第 6 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。
第 4 週	(第 7 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。 (第 8 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。
第 5 週	(第 9 週) 個々の論文担当者から指導を受ける。 (第 10 週) 中間発表に向けてレジメを出席者分の印刷をし、発表に向けて心構えをする。
第 6 週	(第 11 週) 中間発表をする。参加者からの質疑応答をする。 (第 12 週) 中間発表を踏まえ、修了論文の最終仕上げとなるよう、誤字、脱字や正しい形式になっているか再確認する。
第 7 週	(第 13 週) 分析、考察、今後の課題について仕上げる。 (第 14 週) 分析、考察、今後の課題、結論を仕上げる。
第 8 週	(第 15 週) 修了論文が全体を通して成り立っているか論文担当者から指導を受ける。できない部分があれば夏休みを活用して仕上げる。 (第 16 週) 今まで作成した修了論文のまとめをする。個々の論文担当指導者から指導を受ける。
第 9 週	(第 17 週) 今まで作成した修了論文のまとめをする。個々の論文担当指導者から指導を受ける。次週学位授与機構への提出について確認する。 (第 18 週) 専攻科2年生全員で学位授与機構への提出内容を確認し、郵送する。学位授与機構への郵送済みについて個々の論文担当者へ挨拶に行く。
第 10 週	(第 19 週) 学位授与機構における小論文試験についての諸注意と心構えについての説明をする。第1回目の模擬テスト開催 (第 20 週) 第1回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第2回目の模擬テスト開催
第 11 週	(第 21 週) 第2回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第3回目の模擬テスト開催 (第 22 週) 第3回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第4回目の模擬テスト開催
第 12 週	(第 23 週) 第4回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第5回目の模擬テスト開催 (第 24 週) 第5回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第6回目の模擬テスト開催
第 13 週	(第 25 週) 第6回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第7回目の模擬テスト開催 (第 26 週) 第7回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第8回目の模擬テスト開催
第 14 週	(第 27 週) 第8回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第9回目の模擬テスト開催 (第 28 週) 第9回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第10回目の模擬テスト開催
第 15 週	(第 29 週) 第10回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。第11回目の模擬テスト開催 (第 30 週) 第11回目の模擬テストを返却と同時に個々に再度検討する。本番に向けての諸注意と、持参物について確認をする。